

比較文化学部創立20周年を迎えて

著者	佐藤 円
雑誌名	大妻比較文化 : 大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	21
ページ	3-3
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006859/



巻頭言 比較文化学部創立20周年を迎えて

1999年4月に大妻女子大学多摩キャンパスで産声をあげた比較文化学部も、昨年4月には創立満20周年を迎えた。言わば成人年齢に達したということであるが、歴史が古い本学の他の学部と比較すると、まだまだ比較文化学部は「大人の学部」にはなっていない。しかし20年という年月は、確実に学部に変化を与え、少しずつではあるが成長ももたらした。一番の変化は、学部創立のころに中核となったおられた諸先生がすでにみな退職され、学部構成員の多くがこの20年間に新たに着任した比較的年齢の若い教員に入れ替わったことと、学部の所在地が都心の千代田キャンパスにある新しい校舎へ移転したことである。成長という点では、学部創立当初には、どうやってこの比較文化という分野を学生に教育していくのかという課題に試行錯誤の毎日であったが、教員のそれぞれが、それぞれなりに工夫をこらすことによって、その課題がある程度は克服されてきたことがあげられる。かつて第2代学部長であった井田進也先生は、「23人の教員がいれば23通りの比較文化がある」とおっしゃられていたが、その多様性を奨励する精神によって今日まで比較文化学部は、文学、美学、古典学、歴史学、言語学、国際関係学、文化人類学といった多様な専門をもつ教員が教える学際的なカリキュラムを保ちながら、同時に「比較文化」という一つの看板のもとで教育を続けて来られたのである。

その一方で、そもそも「比較文化」とは何かという本源的な問いの追求は依然として残されたままである。「比較文化」という学問分野は、比較的历史が浅いこともあり、明確な方法論が確立されてきたとは言えない。また特定の方法論に縛られることを嫌う傾向もある。それゆえ何が「比較文化」であるかという問いに答えることは、必ずしも容易ではない。とは言うものの、比較文化学部もそれなりの年月を経て、社会に向かって何らかの答えを出す時が来ていると、第5代学部長で現副学長の高山宏先生も繰り返しおっしゃられていた。思い返せば、第3代学部長であった平井一弘先生も、私たち教員は「大妻の比較文化をつくりあげなければならない」と10年目を迎えるころに提言されていた。しかしながらその課題の解決は、20年目を迎えてもまだ道半ばである。

人間も20歳で成熟するわけではない。比較文化学部にもいましばらくの時間が必要であろうが、成熟した「大人の学部」になるためには、まず自らが何者であるのかを説明できるようにすることが必須であろう。この学部の紀要『大妻比較文化』が、それぞれの研究を発表する場を専任教員に提供するだけでなく、むしろ「大妻の比較文化」をつくりあげるための議論の場を提供していくようになることを、新たな10年に向けて願ってやまない。

2020年3月
比較文化学部長 佐藤 円